

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	けんかにみる子どもの言語生態調査
Author(s)	小林, 照子; 堀江, 久子
Citation	児童の言語生態研究 , 11 : 7 - 18
Issue Date	1982-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045121">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045121</a>
Right	
Relation	



## けんかにみる

## 子どもの言語生態調査

小林照子  
堀江久子

はじめに

子どものけんかほど、今日に生きる彼らの言語生態が顕著に表われる例も多くはないだろう。小学生には、静かなけんかといったものが見られにくい。

どちらかが泣くまで、さらに、泣かされた子どもが泣かした子どもを泣かし返すまで、体の動く限り、声の出る限り、本気でやり合うけんかが、低学年にはよく見られる。にらみ合いだけで事が済まないのが低学年のけんかな

のである。また、「先生けんか」と呼ばれて、ゆっくり足を運んでも、騒ぎの最中に十分間に合うのが低学年のけんかだとも言える。それに比べて、急いで駆け付けないと、騒ぎがおさまりにかけていたりするのが、中学年のけん

かである。高学年になると、いつの間にか、けんかで大騒ぎすることは少なくなり、その度ごとに「先生けんか」と呼びに来ることもなくなる。また、けんかが終わった後しばらくしてから、「先生、こんなことがあった」と知ら

せてくることも高学年に多い。けんかを処理できず、ただ大人に仲裁を求めている低学年に比べ、高学年になると、自分たちの力でなんとかしようと努力するようになっているのである。もちろん、高学年のけんかにも、彼らだけでは処理できずに、教師の助けを求める場合がないわけではない。しかし、こういった場合、教師の援助の在り方はむずかしく、けんかを納めた後でもなかなか最善だったとは思いい切れないものである。まさしく、子どものけんかは、情動表現の場である。けんかする子どもは、情動に伴って体もことばも動く。この情動は、けんかを始めた当人に留まることなく、その場に居合わせた子ども、さらに仲裁に入った大人にも伝わってくる。ここまで考えてみても、子どもの言語生動の一つとして、情動の表出する場であるけんかを取り上げる意義は大きい。

## 調査方法

今回は、基礎資料作成を目差し、次に掲げるアンケート用紙を使って、岩手、東京、神奈川、福岡の八校、計千六百十一名の児童に答えさせた。質問事項は問一から問十三まで、六十五項目あり、問一で、けんかをしたことがあるかないかを確かめた後、問二から

問九では、けんかの行為について、それぞれ「イ、やったことはあるがやられたことはない」「ロ、やったことはないがやられたことはある」「ハ、やったこともやられたこともある」「ニ、やったこともやられたこともない」といった、四方向からの問いに答えさせた。問十では、けんかで泣くことが勝敗感とどのようにかわっているか、という視点から五つの問いに、問十一では、けんかの予備意識に関する十五この問いに、問十二、問十三では、けんかで使うことばに関する十一この問いに答えさせた。

答え方としては、問われたことに「じぶんでそうだ」と思ったら丸をつける、という一問一答式を使用した。問いによっては、二つ以上の問いに丸をつけると矛盾を生じるものもあるが、その場合でも、他の問いの答えとの相互関係は意識させずに、一問一答式で答えさせた。

### ◎アンケートの内容

けんかについて、これからたずねます。じぶんでそうだとおもうものに、しようじきに○をつけてください。

〈問一〉あなたは、いままでにけんかしたことがありますか。

イ、ある  
ロ、ない

〈問二〉あなたは、けんかのとき、人をぶったり、人からぶられたことがありますか。

イ、人をぶったことはあるが、ぶられたことはない。  
ロ、人をぶったことはないが、ぶられたことはある。  
ハ、人をぶったこともあるし、ぶられたこともある。  
ニ、人をぶったこともないし、ぶられたこともない。

〈問三〉あなたは、けんかのとき、人をけったり、また、人からけられたことがありますか。

イ、人をけったことはあるが、けられたことはない。  
ロ、人をけったことはないが、けられたことはある。  
ハ、人をけったこともあるし、けられたこともある。  
ニ、人をけったこともないし、けられたこともない。

〈問四〉あなたは、けんかのとき、人をつねったり、また、人からつねられたりしたことがありますか。

イ、人をつねったことはあるが、つねられたことはない。  
ロ、人をつねったことはないが、つねられたことはある。

ハ、人をつねったこともあるし、つねられたこともある。  
ニ、人をつねったこともないし、つねられたこともない。

〈問五〉あなたは、けんかのとき、かみの毛をひっぱったり、ひっぱられたりしたことがありますか。

イ、ひっぱったことはあるが、ひっぱられたことはない。  
ロ、ひっぱったことはないが、ひっぱられたことはある。  
ハ、ひっぱったこともあるし、ひっぱられたこともある。  
ニ、ひっぱったこともないし、ひっぱられたこともない。

〈問六〉あなたは、けんかのとき、つばをかけたか、かけられたりしたことがありますか。

イ、かけたことはあるが、かけられたことはない。  
ロ、かけたことはないが、かけられたことはある。  
ハ、かけたこともあるが、かけられたこともある。  
ニ、かけたこともないし、かけられたこともない。

〈問七〉あなたは、けんかのとき、石をなげつけたり、なげつけられたりしたことがありますか。  
イ、なげつけたことはあるが、なげ

つけられたことはない。

ロ、なげつけたことはないが、なげつけられたことはある。

ハ、なげつけたこともあるし、なげつけられたこともある。

ニ、なげつけたこともないし、なげつけられたこともない。

へ問八 あなたは、けんかのとき、かみついたり、かみつかれたりしたときがありますか。

イ、かみついたことはあるが、かみつかれたことはない。

ロ、かみついたことはないが、かみつかれたことはある。

ハ、かみついたこともあるし、かみつかれたこともある。

ニ、かみついたこともないし、かみつかれたこともない。

へ問九 あなたは、けんかして、泣いたことがあるかどうか。

イ、あいてをなしかしたことはあるが、なかされたことはない。

ロ、あいてをなしかしたことはないが、なかされたことはある。

ハ、あいてをなしかしたこともあるし、なかされたこともある。

ニ、あいてをなしかしたこともないし、なかされたこともない。

へ問十 あなたは、けんかして、泣くことにどうおもっているか。

イ、けんかしてないたら、けんかにまけたことになる。

ロ、けんかしてなくても、けんかにまけたことになる。

ハ、けんかして、あいてをなしかしたら、けんかにまけたのだ。

ニ、けんかして、あいてをなしかしても、けんかにかかっていない。

ホ、けんかしてなくのは、けんかのちかちかしてかんけいがない。

へ問十一 あなたは、けんかについてどうおもっているか。つぎのうち、あたっているものに○をつけてください。

イ、じぶんは、けんかによい。

ロ、じぶんは、けんかによくない。

ハ、じぶんは、けんかをあまりやらないので、つよいが、よわいかわからない。

ニ、いままでのけんかで、まけたことはない。

ホ、いままでのけんかで、まけたことはある。

ハ、あまりやったことはないが、やったらぜったいかつ。

ト、まけるかもしれないけど、けんかはかちたい。

チ、けんかなんかまけてもいいとおもっている。

リ、かちたくはないが、まけたくはない。

又、けんかは、こわいから、きらい。

ル、けんかは、じぶんからやらないが、しかけられたらやる。

ヲ、かつけんかはやるが、まけるけんかはしない。

ワ、けんかは、よわいものとやっちはいけないが、つよいものとならやっつよい。

カ、男の子が、女の子をあいてにけんかするのは、みともない。

ヨ、女の子が、男の子をあいてにけんかするのは、みともない。

へ問十二 あなたが、けんかのときにつかったことがあるとおもうことばは、つぎのどれでしょう。

そのことばに○をつけてください。

イ、たすけて。

ロ、このヤロウ。

ハ、チクショウ。

ニ、やるならやってみろ。

ホ、やるきか。

へ問十三 あなたが、けんかのおわり

おもうことばはつぎのどれでしょう。そのことばに○をつけてください。

イ、まいった、まいった。

ロ、こうさん。

ハ、おぼえてろ。

### 調査校

一年生 東京 南第四小 八十二名

大和田小 四十九名

聖徳学園小 三十四名

四谷第六小 三十四名

横浜 汐見台小 三十六名

(計 二百三十五名)

二年生 東京 南第四小 八十一名

大和田小 三十名

聖徳学園小 五十名

四谷第六小 四十名

横浜 汐見台小 四十一名

遠野 附馬牛小 三十名

(計 二百七十二名)

三年生 東京 南第四小 八十四名

大和田小 三十八名

聖徳学園小 三十三名

四谷第六小 三十六名

横浜 汐見台小 三十九名

遠野 附馬牛小 十六名

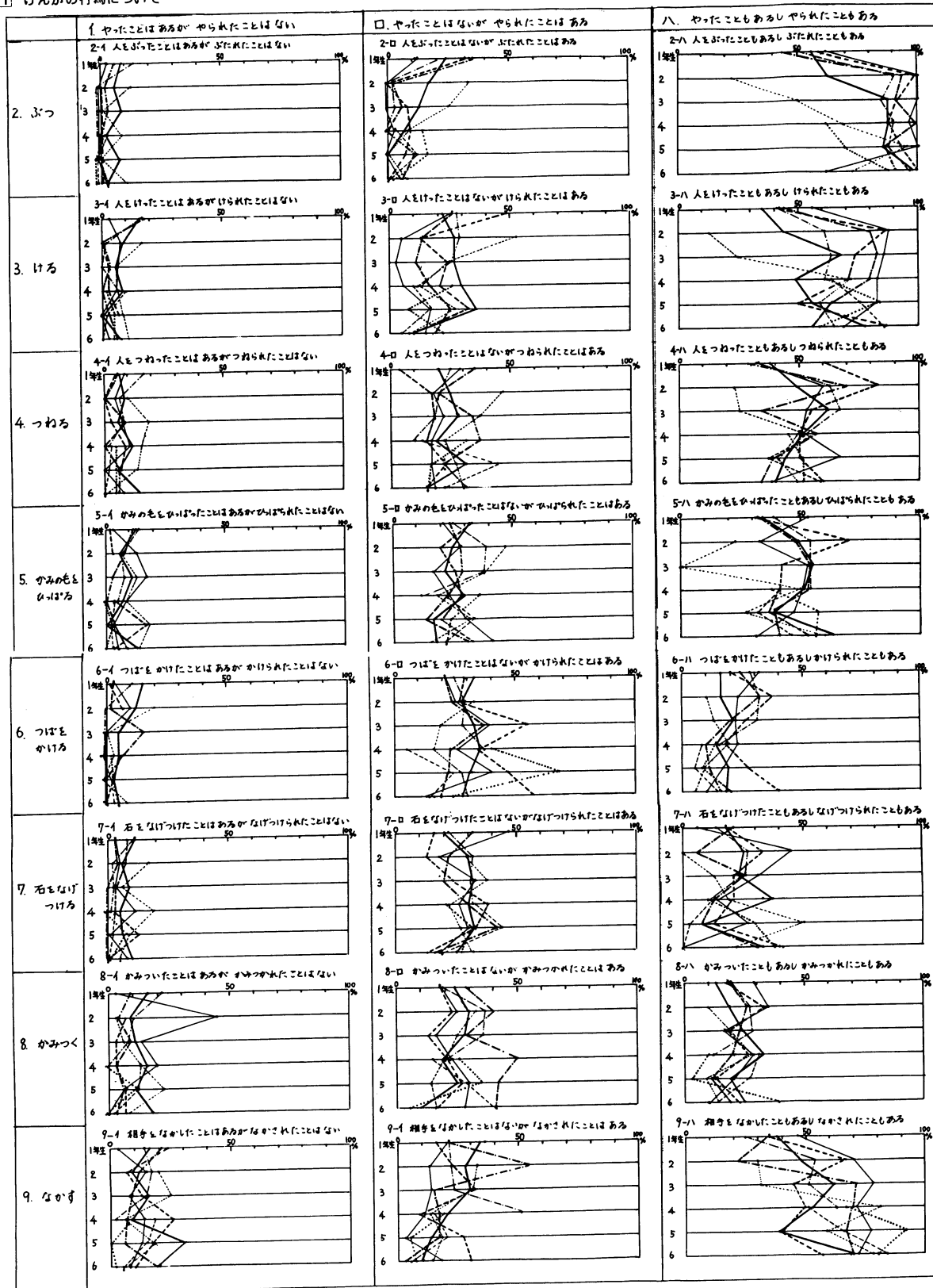
(計 二百四十六名)

四年生 東京 南第四小 四十三名

大和田小 三十四名



① けんかの行為について



がある」事実より「やられたことがある」事実の方が表われやすいのだ、という点は明らかになった。

加害者意識につながる「イ、やったことはあるがやられたことはない」は、0～20%まで、被害者意識につながる「ロ、やったことはないがやられたことはある」は、4～53%まで、という結果から見ても、加害者であることを認めない子どもはいても、被害者であることを認めない子どもは一人もいないのである。以上のように見ると、子どものけんかは、加害者意識より、被害者意識に結びつきやすいと考えられる。

## 2 やたらにかみついたりほしない

答えの数値が多いか少ないかということで、九つの行為を二つに大別することができ、各項で、「ハ、やったこともやられたこともある」に答えた数値を大づかみにすると、「ぶつ85～100%」「ける50～80%」「つねる40～70%」「かみの毛をひっぱる40～55%」「つばをかける10～30%」「石をなげる10～40%」「かみつく10～30%」「なかつ40～70%」となる。これを見ると、「ぶつ」「ける」「つねる」「かみの毛をひっぱる」「なかつ」は、50%以上の数値が多いのに対し、「つばをかける」「石をなげる」「かみつ

く」では、30%前後に集中している。また、ぶつ以外の行為に、100%という数値は見られなかった。

「ニ、やったこともやられたこともない」に答えた数値を見ても、「つねる」「かみの毛をひっぱる」は30%以下が多いのに対して、「つばをかける」「石をなげる」「かみつく」は、30～60%が多い。また、ここでは「ぶつ」「ける」「なかつ」に0%が見られた。以上の結果から、けんかの行為は、「ぶつ」「ける」「つねる」「かみの毛をひっぱる」「なかつ」が一般的であり、中でも「ぶつ」が多いという点が見らなれた。さらにもう一つ、「つばをかける」「石をなげる」「かみつく」といった呪術的行為も見られるが、他の行為にくらべると少ない、という点も上げられる。

## 3 かみつかれたことは忘れない

「つばをかける」「石をなげる」「かみつく」といった呪術的行為の表われ方が、他の行為と違う点は、「ロ、やったことはあるがやられたことはある」に答えた数値にも見られた。「ハ、やったこともやられたこともある」では、呪術的行為が他の行為に比べて少なかったのに対し、ここでは他の行為より多いのである。数値を大づかみにすると、「ぶつ0

～10%」「ける10～30%」「つねる15～35%」「かみの毛をひっぱる20～30%」「つばをかける20～40%」「石をなげる20～40%」「かみつく20～40%」「なかつ10～30%」となる。

大きな差ではないが、この差は、呪術的行為が他の行為以上に、被害者意識と結びつきやすいことを意味している。このように、他の行為に比べると呪術的行為は、特別の場合に表われるものであり、これが表われると後に被害者意識としてのしこりを強く残す、と考えられる。

## 4 高学年になるとやたらに手は出さない

けんかの行為の学年発達についても、いくつかの傾向が見られた。「ハ、やったこともやられたこともある」に答えた数値を見ると、二年生でぐっと増えるものが多い。五校中五校とも増えているのが、「ぶつ」「ける」「つねる」「かみつく」、四校増えているのが、「かみの毛をひっぱる」「石をなげる」「なかつ」、三校が「つばをはく」である。

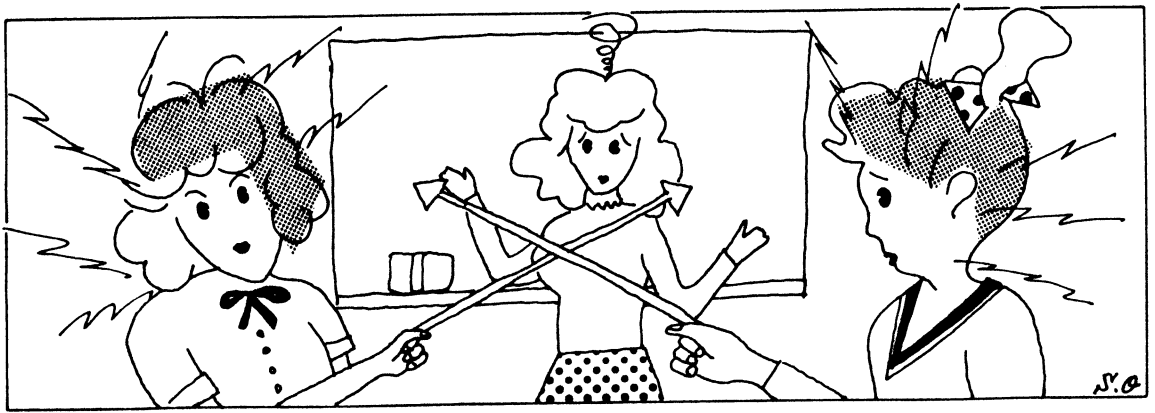
また、五年生で減り六年生で増えているものもある。「かみの毛をひっぱる」は、八校中六校、「石をなげる」「かみつく」は五校、「ぶつ」「ける」「なかつ」は三校、「つねる」「つば

をかける」は、二校で増減が見られた。これとは逆に、五年生で増え六年生で減っているものとしては、「ぶつ」の八校中三校、「つねる」「石をなげる」「なかつ」の二校の他、「ける」「かみの毛をひっぱる」「つばをかける」「かみつく」の二校に、増減が見られた。こちらは、前者に比べると少なかった。

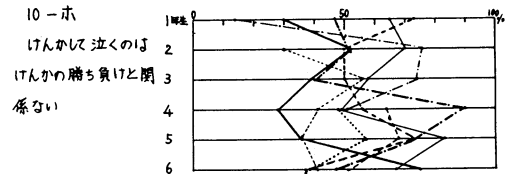
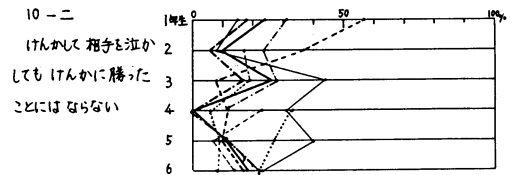
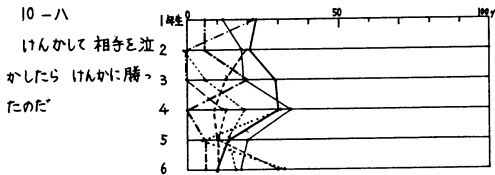
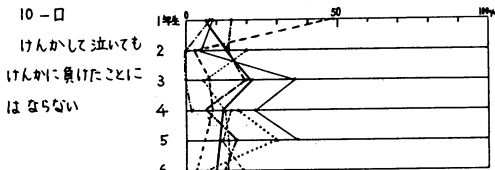
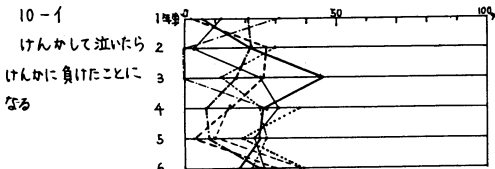
このように、二年生で急激に増えた数値は、それぞれ学年が進むごとに変化しているが、調査校によってばらつきが大きいために、ここに掲げた以外のものをはっきりした傾向としてつかまえることはむずかしい。

以上の結果から、二年生になるとけんかの行為が活発になること、活発な行為は六年生になるまで続くが、各学年によって行為の表われ方に違いがあるということが明らかになった。この点をさらに考察すると、一年生に比べて二年生のけんかは、行為としてはっきり表われるようになるが、まだ、できる技なら、なんでもかんでも使っているけんかしている段階にあるのが、学年を追って、時と場合、相手によって、行為を選択するようになり、五・六年生になると、技を使いこなす段階に入っていると考えられる。

## 5 六年生になるとやられても前ほど



② けんかで泣くことと勝敗感について



こたわらなくなる。

被害者意識につながる「ロ、やったことは無いがやられたことはある」の答え方にも学年発達が見られる。

調査校によって数値の差が大きい中でも、五年生で増え六年生で減る、といった傾向をつかむことができた。五年生で増えた数値が六年生になって減っているのは、「ける」が八校中七校、「石をなげる」が六校、「かみつく」が五校、「ぶつ」「つねる」「かみの毛をひっぱる」「つばをかける」が三校、「なく」が二校である。これとは逆に、五年生で減り六年生で増えるといったものもあるが数は少ない。

この結果から、五年生と六年生の間では、被害者意識の度合いに違いがあるということが明らかになった。被害者意識が六年生で少なくなったからといって、加害者意識が多くなっているかというところではなく、加害者意識も、大部分が五年生の時と同じか、それより少ないか、である。このことから、六年生になると、五年生までのような被害者というこだわりから、幾分開放されるようになると考えられる。

勝敗感について

けんかで泣くことと勝敗感に関する問十のイ、ロ、ハ、ニ、ホ、五問に答えた数値は、どの問にも、学年・学校によってバラつきが大きかった。「イ、泣いたら負けたことになる」0と45%「ロ、泣いても負けたことにはならない」0と48%、「ハ、泣かしたら勝つのだ」0と34%、「ニ、泣かしても勝ったことにはならない」0と57%、「ホ、泣くことは勝ち負けと関係ない」と答えた子が多い。この五問の答えの相互関係に注目すると、学年発達が見られる。

1. 泣いても終わらない三年生のけんか

「イ、泣いたら負けたことになる」に答えた三年生の数値の最低と最高は0と45%、「ロ、泣いても負けたこと



にはならない」では0・32%となっている。このように、三年生の数値にはバラつきが大きいだけではない。「ハ、泣かしたら勝ったのだ」で、六校中四校の数値が増えているのに、それと反対の「ニ、泣かしても勝ったことにはならない」でも、六校中五校が増えているといった矛盾も見られる。それならば、「ホ、泣くのは勝ち負けと関係ない」で答える子が多いのかというと、50%前後に集中している。これは、三年生のけんかが、どちらかが泣いたかたという、まだ勝ったとも負けたとも決められない段階にあることを意味している。教室での経験を合わせると、泣いたからといって終るのではなく、泣いたことによって新たに始まるのが三年生のけんかだと考えられる。

## 2 涙で勝敗が決まり始める四年生

次に四年生の数値に見られた傾向を上げよう。「イ、泣いたら負けたことになる」の六校中三校、「ハ、泣かしたら勝ったのだ」の四校で、四年生の数値が増えている。さらに、「ロ、泣いても負けたことにならない」の六校中三校、「ニ、泣かしても勝ったことにはならない」の五校、「ホ、泣くのは勝ち負けと関係ない」の四校で、四年生の数値が減っている。

三年生で見られた矛盾も四年生にな

って見られなくなった。イ、ロ、ハ、ニは、どれもまだ40%以下なので、まだ全部がそうだとは言えないが、四年生になると、泣くことによってけんかの勝敗を決めるようになることは、明らかである。

## 3 五年生より涙で勝敗が決まりやすい六年生

「イ、泣いたら負けたことになる」の八校中五校、「ハ、泣かしたら勝ったのだ」の三校は、五年生で減り六年生で増えている。さらに、「ロ、泣いても負けたことにならない」の、八校中四校、「ホ、泣くのは勝ち負けと関係ない」の五校は、五年生で増え、六年生で減っている。また、増減の幅は5・25%である。

「ホ、泣くのは勝ち負けと関係ない」で答えた五年生の最低・最高が、36・83%、六年生が37・75%、という数値を見ただけでは、大きな違いもないが、50%を中心に置いて見ると、50%以上のものが五年生では八校中六校であったのが、六年生になって三校に減っている、というように、違いが明らかに

なる。五年生に比べて、被害者というこだわりから幾分か解放された六年生ではあるが、この結果を見ると、泣くことと勝敗感とが、五年生以上にかかわ

っていることがわかる。しかし、泣くことと勝敗感とがかかわっているといっても、四年生のかかわり方と同一視することは危険である。やたらに手出しをしないだけではなく、やられてもこだわりが少なくなっている六年生が泣くというのは、よほど深刻な場合なのではないか。それだけに、泣くことと勝敗感とに敏感になるのだとも考えられる。

## へけんかの予備意識について

子どもたちは、いつ出会うかもしれないけんかに備えて、どのような意識を持っているのか。その予備意識を、強弱意識、勝利への願望、けんか相手との力関係といった角度から探ろうとしたのが、問十一、イからヨまでの十五問である。

## 1 いつまでも強者のままではいられない

イからロまでの数値を大づかみにすると、「イ、強い」5・20%、「ロ、弱い」10・30%、「ハ、強い」か「弱い」かわからない」25・45%となり、強いと答える子に比べ、弱いと答える子どもの方が、約10%多くなっている。次に「イ、強い」は、四谷第六小を除くと三年生でぐっと減り、四年生から六年生まで20%以下に留まっているのに対し、「ロ、弱い」は、五年生でもう

46%もの開きがあり、六年生にならないと、25%以下にはならない。また、「ロ、弱い」の六校中四校が、四年生で減り五年生で増え六年生で減る、といった変化を見せている。

以上の結果から、強者意識は弱者意識よりも得られにくい上に、低学年で得られたとしても高学年まで持続することはない点、強者意識より得られやすい弱者意識も、学年によって変化する点が明らかになった。

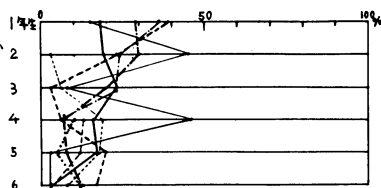
六年生で数値の減るものを上げると、「イ、強い」八校中四校、「ロ、弱い」六校、「ハ、強い」か「弱い」かわからない」五校となる。この結果から、五年生までに定まりきらなかった強弱意識が、六年生になると、「強い」か「弱い」かわからないわけではないが、強いとも、弱いとも言いきれないといった段階、すなわち、絶対的な強弱意識の段階に入ろうとしていることがわかる。

さらに、「ワ、けんかは弱い者」とやってはいけないが強い者とならやってよい」の数値は、一年生で24・53%とあるのが、学年を追うごとに少なくなり、六年生では3・23%となっている。その際、五年生で一度多くなっているが、八校中四校である。このことから、一年生の時は、まだけんかの強弱意識が、

### ③ けんかの予備意識について

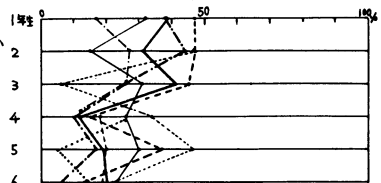
11-イ

自分はけんかに強い



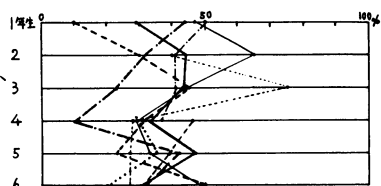
11-ロ

自分はけんかに弱い



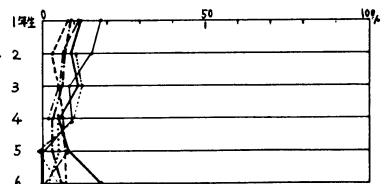
11-ハ

自分はけんかをあまりやらないので強い  
弱いかわからない



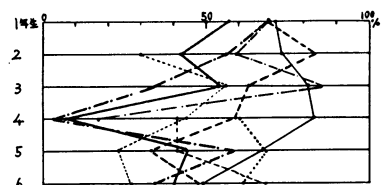
11-ニ

今までのけんかで  
負けたことはない



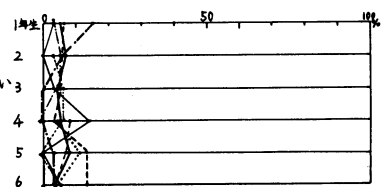
11-ホ

今までのけんかで  
負けたことはある



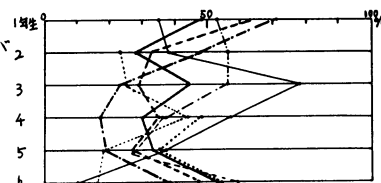
11-ヘ

あまりやったことはないが  
やったらぜったい勝つ



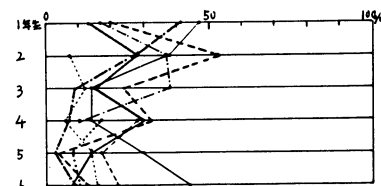
11-ト

負けるかもしれないが  
けんかは勝ちたい



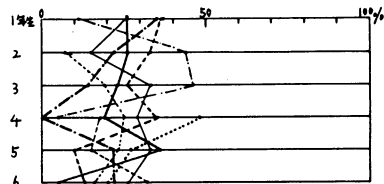
11-チ

けんかなんか負けて  
もいと思っている



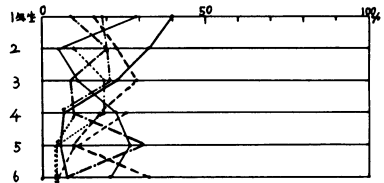
11-リ

勝ちたくはないが  
負けたくはない



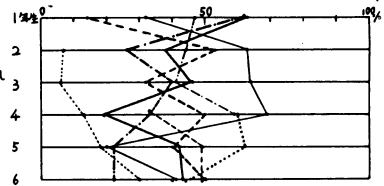
11-ヌ

けんかはこわいから  
さらい



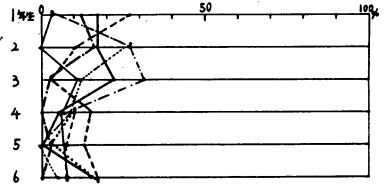
11-ル

けんかは自分から  
やらないが しかけられ  
たらやる



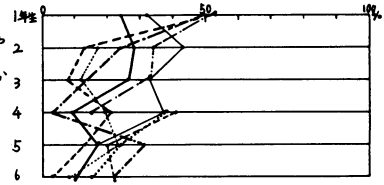
11-ヅ

勝つけんかはやるが  
負けるけんかはしない



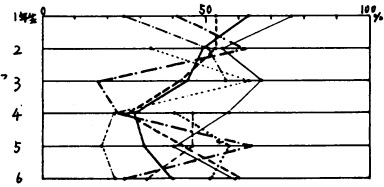
11-フ

けんかは弱い者とや  
ってはいけないが 強い  
者とならやてよい



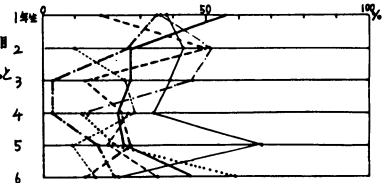
11-カ

男の子が女の子と相  
手にけんかするのはみ  
ともない



11-コ

女の子が男の子と相  
手にけんかするのはみ  
もないことはない



親などから与えられた道徳観というようなものと深くかわりあっている。高学年になるにつれて、自分で判断した強弱意識に変わりつつあると考えられる。

## 2 負けたくないというより勝ちたいのだ

大づかみにした数値を見ると、「ト、まけるかもしれないがかちたい」が30と50%、「リ、かちたくはないがまけたくはない」が10と35%となっており、どの学年でも、「勝ちたくはないが負けたくはない」と思っている子より、「負けたくないが勝ちたい」と思っている子の方が約20%も多い。この結果からは、どの学年でも、負けることへの恐れより、勝つことへの願望が強いのだということが明らかになった。

## 3 負けは認めない四年生

「ニ、今までのけんかで負けたことはない」と答えた子は0と10%に集中しているが、「ホ、今までのけんかで負けたことはある」と答えた子は、大づかみにしても30と70%と、幅が大きい。また、この問いに答えた四年生の数値は、六校中五校が、三年生の時に比べると急に少なくなっている。その他にも、四年生の数値は、「ト、負けられないがけんかは勝ちたい」

で六校中四校、「リ、勝ちたくはないが負けたくない」で四校、「ヲ、勝つけんかはやるが負けるけんかはしない」で、五校が少なくなっている。

これらの結果から、けんかの予備意識における変わり目は四年生にある、ということが明らかになった。低学年のときは、「勝ちたい」「負けたくない」といった願望にとられなくなっていることは確かである。とはいえそれはあくまでもけんかをする以前の意識であって、けんかをした後では、どの学年よりも負けたことを認めようとしないうのが四年生なのである。「ル、自分からやらないがしかけられたらやる」で、六校中四校の四年生が増えていることを考えあわせると、何も起こらないときは、「けんかに勝ちたい」と強く意識していなくても、しかけられたけんかには立ち向かい、けんかが終っても負けを認めない、というのが四年生の持つけんかの予備意識だといえる。

## 4 負けてもいいと思うことは六年生でもむずかしい

四年生で変わった予備意識が、その後どのようになるのかという点に注意して結果を見た時、五年生から六年生にかけての数値の変化は見逃せない。「ホ、今までのけんかで負けたことは

ある」では、四年生で急に少なくなった数値が、五年生で50%前後となり、六年生でもそのまま変わらない。四年生で少なくなっているから、六年生まで変わらないものには、「ヲ、勝つけんかはやるが負けるけんかはしない」も、上げられる。「負けたことを認めたがらない」というのは、四年生ならではのこだわりで、五年生になれば、負けても認められるようになる、ということがここで明らかになる。

しかし、「チ、けんかなんか負けてもいいと思っている」の六年生の数値が、四谷第六小を除くと、8と22%だという結果からは、六年生になっても負けてもいいと思える子が少ない。また、

「リ、勝ちたくないが負けたくない」は四年生で急に少なくなったが、五年生で10と36%、六年生で5と32%であり、「ト、負けるかもしれないが勝ちたい」では、四年生17と57%、五年生18と44%、六年生10と59%となっている。これらの結果から、けんかで勝つことへの願望は、五・六年生になってもそれほど強くなるということはないが、決して消えることはなく持ち続けられるものなのだ、と考えることができる。

## 5 女の子相手のけんかはみっともない

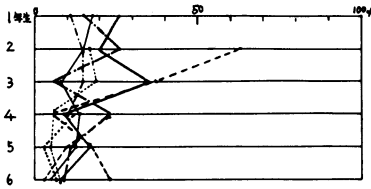
い

「カ、男の子が女の子を相手にけんかするのはみっともない」「ヨ、女の子が男の子を相手にけんかするのはみっともないことはない」の数値から、けんか相手と男女意識との関わりが見られる。大づかみにすると、どちらにもはっきりした学年差は見られないのだが、「男の子が女の子を相手にけんかするのはみっともない」が30と60%、「女の子が男の子を相手にけんかするのはみっともない」が10と40%というように、主体を男の子に置いた上で、男女のけんかをみっともないとする見方の方が、20%も多くなっている。ここから、小学生では半数以上の子が、「男の子が女の子を相手にけんかするのはみっともない」というこだわりを持っている点、また、「女の子が男の子を相手にけんかするのはみっともない」というこだわりから、まだのがれられずにいる子も半数に近い、という点が明らかになった。さらに、「みっともない」ということばにこれだけの反応が見られるのは、小学生が異性を相手にけんかする場合、人目を意識せずにはいられないためである、と考えられることもできる。

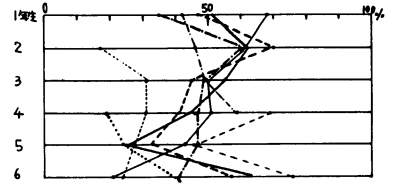
## 1 強気のことばについて

④ けんかではくことばについて

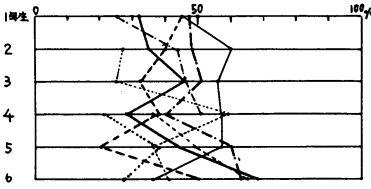
12-イ  
たすけて



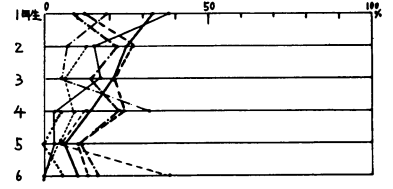
12-ト  
ざまあみろ



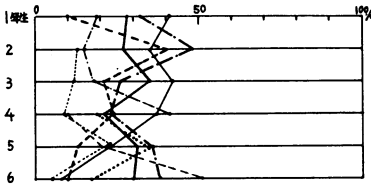
12-ロ  
このやろう



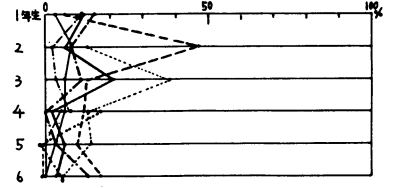
12-チ  
ちえっ



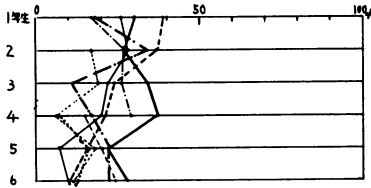
12-ハ  
チクショウ



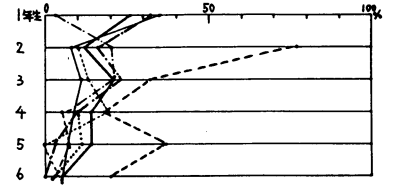
13-イ  
まいった まいった



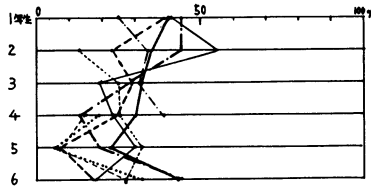
12-ニ  
やるなら やって  
みろ



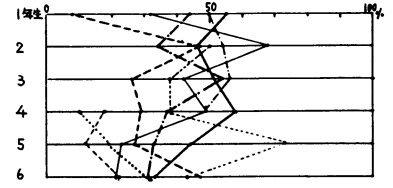
13-ロ  
こうさん



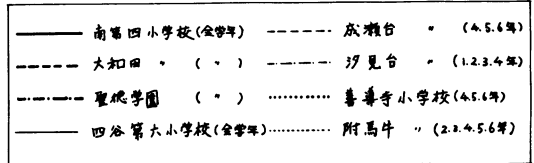
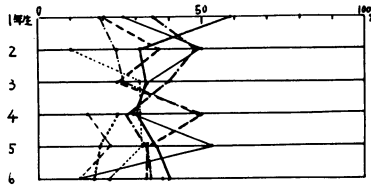
12-ホ  
やる気か



13-ハ  
おぼえてろ



12-ヘ  
やったな



けんかのきっかけとなるようなことばには、多くても76%といった数値しか見られず、特に多いものの少ないもの以外は、およそ30〜40%前後で、はっきりした学年発達も見られなかった。大づかみにした数値が少ないのは「イ、たすけて」5〜25%である。それに比べて「ハ、チクショウ」20〜40%、「ニ、やるならやってみろ」10〜30%、「ホ、やる気か」10〜35%といった、けんかへの強い意気込みが表われていることばの数値の方が多かった。さらに多かったのは、「ロ、このやろう」30〜55%、「ヘ、やったな」20〜50%、「ト、ざまあみろ」30〜60%で、今回は「ざまあみろ」が最高であった。また、「チ、ちえっ」は0〜25%であり、五・六年生になると、ほぼ15%以下になった。これらの結果から、小学生のけんかでは、どの学年でも、弱気なことばより強気なことばをおうとして、いることがわかる。また、舌うちば、あまり多く使われていない。

2 やる気よりやられたことに  
学年発達のつかまえていく、けんかのことばであるが、「ホ、やる気か」と「ヘ、やったな」を比べた時に限り一つの傾向を見ることができた。

五年生では、「ホ、やる気か」5〜33%、「ヘ、やったな」19〜53%とい

うように、やったなの方が20%近くも多いのに、六年生になると、「ホ、やるきか」17→44%、「へ、やったな」11→40%となり、二つのことばの表われ方に、差が見られなくなっている。低学年、中学年を見ると、二年生ではどちらも10→50%で差は見られないのが、三年生、四年生になると、約5→10%「へ、やったな」が多くなっている。

このように、「やる気か」より「やったな」が多く使われる傾向は、三年生から少しずつ見られるようになり、五年生になると、明らかな差になっているのだが、六年生になると、この差はなくなり、かえって「やる気か」の方が多く見られるようにさえなっているのである。これらの結果は、五年生までは、相手からしかけられた行為に対する発言が多かったのが、六年生になると、相手からしかけられた行為に対する発言より、相手がこれからしかけようとしている構えに対する発言の方がわずかに多くなっていることを明らかにしている。こうして、けんかで使うことばの違いからも、けんか相手に向ける意気込みの発達をつかまえることができた。

### 3 おぼえてろ

けんかのおわりに使うことばでは、

「1、まいったまいった」0→15%、「ロ、こうさん」0→20%というように、降伏を認めることばは少なく、それに比べると、「ハ、おぼえてろ」25→55%と捨てせりふが多い。この、「ハ、おぼえてろ」は、五年生で12→73%だったのが、六年生で21→47%となって五年生がピークとも見られた。

### まとめ

以上のように、けんかのアンケート調査から、小学生の言語生態を見てきたわけだが、ここで、調査集計の際に配慮した点を上げておきたい。

まず、一年生から六年生の全部に、質問の意図を確実に伝えるため、子どもが黙読して答える方法は避け、教師が問題を一問ずつ読み上げながら、答えさせる方法をとった。その際、どの教師も、声音に感情をこめて、おもしろおかしく読むようなことはせず、ごく単調に、できるだけはつきりと読み上げるようにした。それにもかかわらず、子ども達は大喜び。六十五この問題を一問々々読み上げるたびに、歓声やら笑い声やらが絶えなかった。

また、児童の言語生態研究会で今までに行なってきた数々の調査の中でも、とりわけ自分のクラスの集計が楽しかったのも、今回のアンケート調査であ

った。「今までのけんかで負けたことはない」に丸をつけているのはだれだろう、と思って調べてみると、なるほど、普段からわんぱくでけんかにも強く、気が大きくて元気な太郎君だった。「けんかはこわいからきらい」に丸をつけている子は、いつも泣き虫でおとなしい花子ちゃんだったり、アンケートの解答と、ふだんのその子の言動を照らしあわせることが、実に楽しかった。

次に配慮したのは、数値の大きな学校差である。大きな学校差が見られた原因は、その学級を構成している子どもの性格や人間関係によって、さらに、子どもが生活している地域の社会環境によって、けんかの意識にも違いがあるからだ、と考えることができる。そこで、調査結果を考察する際に、この学校差を保持するためにも、全調査校の平均は求めず、あくまで学校別の数値から、大まかな傾向を発見するようにした。

以上の点に配慮しながら進めた考察からは、予想以上の仮説を見出すことができた。「やったことよりやられたことが忘れられない」などは、大人のけんかにも言えることである。これを、そんなことはあたり前だと片づけてしまってはならない。日ごろ子ども

達の前で、けんか両成敗の立場から

「やった子も、やられた子も、どっちもわるい」と断言することが多いだけに、子どもにとっては、「やられたこと」の方が重大問題なのだということを知った意義は大きい。その他にも、「負けたくないというより勝ちたい」「女の子相手のけんかはみつともない」「強気のことばの方がいい」といった

全学年に通じる傾向、「泣いても終らない三年生」「涙で勝敗が決まり始める、負けは認めない四年生」「やる気よりやったことにこだわる五年生」「やたらに手は出さない、やられても前ほどこだわらない、五年生より涙で勝敗が決まりやすい、負けてもいいと思うことはまだむずかしい六年生」といった、学年発達を知ることができたのも収穫である。今回、学校差に関する考察はしなかったが、次の課題として取り上げなければならない問題だと思ふ。これからも、けんかに表われる児童の言語生態を、アンケートによる一斉調査から得られた結果、仮説のみに頼るのではなく数多くの事例を観察研究することによって探求して行きたい。

(東京・町田南四小教諭・兵庫教育大学院生・小林照子)

(神奈川・相模原大野北小教諭・堀江久子)